

紛争地における文化遺産保護のための国際会議

藺浦副大臣スピーチ

(2016年12月3日、於：アブダビ)

本日は、お招き頂きありがとうございます。

本日よりご列席の皆様は、文化遺産が如何に私たちの心と生活を豊かなものとするかをよくご存じの方ばかりであると思います。私たちは未来の世代にこれらを引き継いでいく責務を負っています。

文化遺産が人類全体にとって共通の価値をもつものとして広く認識される一方で、紛争時の攻撃対象やテロの標的に文化遺産が選ばれるという悲劇を、私たちは目撃しているところです。

数千年の歴史を持つ数多くの文化遺産の破壊は、人類の創造性と叡智の証を一瞬にして消滅させるものであり、私たちはこうした悲劇を防ぐために団結しなければなりません。

我が国は、戦後の早い時期から積極的に国際協力を行って参りました。1980年代の終わりには、我が国外交政策の柱の一つとして国際文化交流が位置づけられ、私ども外務省では、ユネスコに「文化遺産保存日本信託基金」を設立しました。以来今日に至るまで、6,800万ドルを拠出しております。

この基金を通じ、アフガニスタンのバーミヤンの文化遺産を対象としたものなど、数々の事業を支援しております。また、イラク博物館の収蔵品保存のための事業も2014年にスタートしました。こうした事業を通じ、我が国は、文化遺産の修復のみならず、対象国の人材育成にも貢献しております。

民間団体もまた、この分野で積極的に活動しておりますが、中でも特筆すべきは、ユネスコ親善大使も務めた故平山郁夫氏の活動であります。平山氏は、アフガニスタンの流出文化財102点を保護し、修復を施した上で、アフガニスタンに返還されました。これは、「セーフ・ヘイブンズ」の取組の一つの先行事例といえるかと思えます。

さて、紛争地の現在の状況にお話を移しましょう。実際に紛争地で起きている文化遺産破壊に対して、今できることは何でしょうか。

まずは、文化遺産を記録し、データを管理するという、ドキュメンテーションとアーカイブ化は、予防的な保護の第一歩といえます。

そして、不幸にして破壊に至った場合、最新の先端技術は、復原の可能性を広げています。今、皆様がスクリーン上でご覧になっている画像は、西藤教授が作成されたパルミラ遺跡のベル神殿です。こうした3D技術や、昨日この会議の場で発表された宮廻教授のクローン技術などは、文化遺産の破壊に対する新たな挑戦です。こうした技術を活かすためには、国際的なデータの共有が不可欠です。

最後になりましたが、アラブ首長国連邦とフランスに対し、この意義ある会議開催の御礼を申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。